

『Mercato Vol.70 原稿』(3500字)

## NPOによる地域情報化の在り方・進め方

### 第2回 関東地域におけるICT支援NPOの活動

山梨大学名誉教授・関東ICT支援NPO連絡協議会代表幹事

伊藤 洋

## 1 関東 ICT 推進 NPO 連絡協議会

これは、特定非営利活動促進法第2条別表第12号「情報化社会の発展を図る活動」を目標に掲げるNPO間の情報交換を行うことによって、その活性化を推進し、合わせてICTによる地域住民の利便性の向上等と公共の福祉に寄与しようという気宇壮大な協議会です。04年6月に発足し、06年11月1日現在96のNPO法人等が加入しています。

事務局を総務省関東総合通信局情報通信部情報通信連携推進課においており、官民合同で和気藹々・丁々発止と活動しています。官・民の情報交換の場としても、民・民同士の切磋琢磨の場としても非常に有効な場となっています。そういう「和気藹々・丁々発止」となるについては、本協議会に得も言われぬ「個性」があるからなのですが、それについては後述します。

### 1.1 その活動

関東ICT推進NPO連絡協議会は、年4回ないし5回に及ぶ主催イベントを行っています。また、毎年特定のテーマについての調査研究活動も行い、その結果を印刷物とWeb上で公表しています。この一年を挙げますと、次のとおりです。

1. 05年10月29日：茨城セミナー（茨城県龍ヶ崎市）。地域メディアに利用可能な携帯型インターネット放送システムの開発、および地域メディアの実践例の報告など。

2. 06年2月4日：栃木セミナー（栃木市）。ICT活用によるNPO・企業・行政との協働のあり方。

3. 同年5月19日：平成18年度総会記念セミナー（東京国際貿易センタービル）。立命館大学教授津田正夫先生による「メディアアクセスと地域活性化」と題する講演につづいて、地域メディア実践にスポットを当てたセミナー。

4. 同年6月8日：千葉地域フォーラム（千葉大学）。「地域メディアの役割と将来展望考察～心の絆とコミュニティ・メディアミックス～」をテーマとした地域メディアの役割と将来展望に関する事例報告など。

5. 同年9月9日：神奈川セミナー（横浜開港記念会館）。作家山根一真氏による「市民リポーターによる人間取材術」、呉連鎬（オウ・ヨンホ）氏による韓国オーマイニュースの活動報告。

6. 同年11月18日：埼玉セミナー（さいたま市）情報化社会における大人と子供のよりよいコミュニケーションを探る活動例。

このような「地域イベント」とは別に、当協議会では下記のように、その時々タイムリーな地域情報化に関する調査研究活動も行っています。

1. 平成 16 年度調査研究：「関東地域における ICT 推進 NPO 法人等の地域情報化に関する実態調査」。
2. 平成 17 年度調査研究：「地域メディア活用事例集」。
3. 平成 18 年度調査研究実施中：「地域メディア作成マニュアル」

## 2 協議会の活動家たち

当協議会には代表幹事を含む 9 人の幹事がいます。特に取り決められているわけではありませんが、様々な配慮によって代表幹事を除いて関東総合通信局管内 1 都 7 県各都県から原則的に 1 名ずつの幹事計 8 人を選出しています。

もし、本協議会のアクティビティが高いと評価されるとすれば、またこれら幹事たちの所属する NPO の活動が活発であると評価されているとすれば、その原因はすべからず彼らのマインドに帰するといっても過言ではありません。そこで、個人情報に抵触しない範囲でこの個性的な幹事たちの紳士録を記して参考に供したいと思えます。

1. まず、幹事 A さんは、ある外資系企業のトップセールスマンでした。A さんが住んでいる町は、そもそも 40 年ほど前までは「たぬき」の数の方が人間の数より多いほどに閑静な田園地帯でありましたが、ここにハイカラなニュータウンが完成して、狸はおろか元の住民ですらコミュニティを失ってしまいました。その失われた人と人の触れ合いの環境を創造しようと A さんは一念発起。輝かしいビジネスマンキャリアを放棄して地域づくりに立ち上がったのです。無収入ゆえに蓄えを食いつぶしながらの悪戦苦闘の末、地域住民の理解を勝ち得て今では人工都市にとってなくてはならない存在として活動の地歩を築いています。NPO 活動のカリスマの一人です。
2. 幹事の B さんも超大手流通企業のエリート社員でした。前世から持ってきたというような明るい人格と、時代を見る的確な眼力、強力な行動力によって日本全国津々浦々に及ぶヒューマンネットワークを持っていること、これがなんと言っても B さんの活動の原動力です。大都市と周縁とをつなぐ安心・安全なネットワークの構築、これが B さんの活動目標。B さんは首都圏の多くの大学で講座を持っていることもあって若者からリタイアリーまで、都市から農山漁村まで広い人脈と多彩な地域に根を張っていることが最良の武器です。
3. 幹事の C さんはお医者さんです。しばらく故郷を離れていたのですが、そこに帰って開業してみると地場産業の

衰退によって伝統は失われ、活力も減退しておりました。これではいけないとCさんは立ち上がりました。幸い同業の夫人の内助の功に助けられて、夜っぴて街の顔役達を説いて回る一方、地域の国立大学の研究室や学生達を自らの輪の中に取り込んで、地域の伝統技術の記録保存や復元などを行ってきました。いま、Cさんの最大関心事はミニFMによって地域メディアを創出し、コミュニティの再生に寄与することです。当分、夫人に頭の上がない日々が続きます。

4. Dさんは紅一点の幹事です。彼女は、高齢者・障害者・不登校の子どもたちなど、いずれもコミュニケーションの弱者のための情報の受信・発信・表現力の回復に活動の中心をおいて頑張っています。デジタルデバイドという格差社会における回復運動は実に大切な活動です。
5. Eさんは、片道90分かかる遠距離通勤を無事定年まで勤め上げました。元々、Eさんは通信会社の幹部社員でしたから、本体を去って子会社社長に転じたのを機にNPOを立ち上げ、私費を投じて地域メディアの普及に余生をかけています。Eさんの周辺には、Eさんと同じように遠距離通信をしてきた元会社員など多くの戦友がいます。この人たちに向けて生涯学習・趣味や娯楽・生活情報等々毎日定時のWebストリーミング放送を続け、イベントがあればカメラとコンピュータを担いで現場から実況放送をするなど、地域に不可欠の存在となっています。ここでも、内助の功が冴えていて、夫人が主宰するフリーマーケットなど女性達の活躍も地域の大きな力になっています。
6. 幹事のFさんは、地域に無くてはならない人としてずっと地元で生きてきました。地域における信頼度は抜群です。それはFさん夫妻の人柄によるものです。その実にやさしい心配りがそのままNPO法人という形をかえた「人」になっているのです。Fさん達の活動は、主として高齢者のデジタルデバイド解消運動であり、高齢化していくコミュニティにあってICTを介して安心を配信して行こうという活動です。地元のCATVの1チャンネルを借りて、マスメディアでは登場の機会の無い人々の画面への参加と、情報伝達・共有、地域伝統産業の再生などを図っています。
7. Gさんは、あまたの幹事の中で最も若い人です。その若さに似合わず人心収攬の力量は大変なものです。ネットデーの仲間作り、市民メディアについての活動だけでなく、その社会的位置づけについてまでメディアの研究者や学界・法曹界の人々とも連携しながら活動を進めるなど、その行動力と企画力は抜群です。
8. 最後にHさんについて紹介しましょう。Hさんは、公立

図書館のライブラリアンとしてその高名は地域はもちろん全国に轟いています。NPOの活動としては、放置すれば散逸し忘れられていくであろう地域資料(主として紙媒体で、農家の蔵などに死蔵されている歴史資料はもちろんのこと、現在発行されている毎日の折り込み広告や回覧板の類。これも100年後には貴重な歴史資料になる)をデジタルアーカイブとして保存する活動を主としています。同時に、崩壊寸前の中山間地域の集落で落ち葉の下に朽ち果てようとしている文化財の記録・保存・所在データベースなどの構築も行っています。活動源は地域図書館の指定管理者活動などに拠っています。

### 3 おわりに

今回は「関東ICT推進NPO連絡協議会」についてご紹介いたしました。ここに参加している会員法人等では実に魅力的な活動が活発に行われていますが、それらについて一々紹介する紙幅はありません。Web上で参照されることをお勧めします。

キラッと輝く活動をしているNPOやボランティア組織を見ると、そこに通底しているものがあります。それは組織を構成するメンバーの志の「ゆたかさ」です。その「ゆたかさ」こそが前号で紹介した「ソーシャルキャピタル」の実質に他なりません。加えて、そこには上述のような得も言われぬ個性を持ち、八面六臂の行動力を持つリーダーが必ずいるということが特徴です。伝統的な胡散臭い地方ボスではなく、こういう「新人類」のいるところにソーシャルキャピタルは蓄積しやすいという特徴があるようです。